

◆特集 みんなの学習講座



コンピュータ制御の旋盤。手動の旋盤を使用している工場と比較し「特別剰余価値」を得ることが出来る。

的資本の増大というのはこのことを意味します。
司会Ⅱテキストの付録（P 97）に生産的資本について書かれています。①加工される原料②機械、材料や建物③

労働者の維持に充てられる資本部分、この3つが生産的資本であるということです。

特別剰余価値

IⅡしかし他の資本家を出し抜いて得た特権は長続きしません。同様に新しい生産方法を手に入れ、それが平準化・一般化し、特権ではなくなるのです。しかしこの特権を得るための競争は、果てしなく続き、規模も大きくなっていくのです。これこそが商品の価格を必然的にその生産費に一致させる法則に他ならないのです。

競争は、商品の価格を生産費まで引き下げ、すなわち同一価格でますます多量の生産物を供給することを命令的法則たらしめることによって、この力の金

の果実を資本から奪おうとするのです。ここでは特別剰余価値のことを説明していると思います。

司会Ⅱ新しい用語「特別剰余価値」が出ましたね。とにかく資本家は他の資本家に勝たたい、自分の商品で市場を独占したいと考えます。そのため他の資本家よりも少しでも安い値段の商品をつくらうとします。新しい機械を導入することなどで生産力を上げて、より多く生産し、より安く売ることが追求されます。これが特別剰余価値です。ただし、すぐにこの特別な状態は一般化・平準化されて特別なものではなくなると書かれてもいますね。

SⅡ他の資本家がすぐにそれを真似すれば消えてしまいます。あくまで一時的な利得であり、この僅かな価値を資本家は競争して取り合うのです。それが資本家の使命なのです。金の果実というのが特別剰余価値のことです。

YⅡ他の資本家よりも先んじて合理化

◆みんなの学習講座

を進めたら儲かるというわけです。いち早く次の画期的な生産手段を手に入れるか、労働者の賃金を減らすかということになります。

生産的資本の増大と労賃の決定

IⅡ生産的資本の増大と不可分なこれらの事情は、労賃の決定にどう影響をするのでしょうか。次の三つのことが書かれています。

①より進んだ分業は、一人の労働者に五人、十人、二十人分の労働をさせる。だからそれは、労働者たちの間の競争を五倍、十倍、二十倍に増加させる。

②分業が進むと同じ程度で労働が単純化される。熟練は無価値となり、誰にでもできる労働となる。労賃はますます下落する。競争が増加し、労賃が下落する。

③機械は、熟練労働者を不熟練労働者に、男子を女子に、大人を子どもに、

取って代わらせる。この戦いの特色は労働者の募集によってよりむしろ解雇によって勝利が得られるということである。資本家たちは、相互に誰が最も多く労働者を解雇させるかを競争する。司会Ⅱ生産的資本の増大が労賃の決定に結び付くという結末は、労賃は下がっていき、最後には首も切られるということなのでですね。何かここで質問がありますか。

AⅡ「分業の増進」というのは、どのようなイメージでしょうか。

IⅡ車の組み立てをイメージしてください。ベルトコンベアで流していきながら、工員が部品を装着したり、ねじを締めたり、各作業をしていき、最終的に1台の車が完成するというような分業ですかね。つまり一つの商品を作るのに多くの労働者が携わっているということですよ。

AⅡなるほど。規模が大きくなればなるほど、一人で全て作るのが難しくな

り、分業してやっていかざるを得なくなるということですよ。

SⅡ最初は工場制手工業で、工員を一カ所に集めてそれぞれに同じ材料を渡してそれぞれが同じ商品をそれぞれに作っていたのです。そのうち、その商品の一部分を一人の工員に作らせ、別の部分を別の工員に作らせというようにやったところ、生産量が大幅に増えたのです。そして次には手で行っていた全ての作業から、その一部に機械が導入されてくる。手作業と機械作業の分業です。それから他の会社が部品生産を行って、それを集めてきて組み立てていくという社外分業という形になっていく。それによって熟練労働者が必要なくなってきました。誰でもできる作業はかりになっていくのです。分業の方向はどんどん拡大されていくのです。分業の増進というのはそういうことです。



分業、フォード自動車工場における生産ラインの流れ作業（戦前）

労働者は悪条件におかれる

IⅡ経済学者たちは、機械によって過剰となった労働者は、新たな就業部門を見出すと説明するが、経済上の全ての法則からして、近代的産業のもとは、必然的に、簡単に低級な仕事が、

複雑で高級な仕事にとって代わるのである。解雇された労働者大衆は、より低く、より悪く賃金が支払われているところに移る以外に道はないのです。さらに経済学者は、機械そのものの製作に従事する労働者は、より多くの機械が産業で必要とされるから、必然的に増えると言うのですが、機械の制作自体も精巧な機械による生産が増大し、その主張は正当性を失ったのです。

工場は、機械の導入によって一人の男子を解雇し、代わりに三人の子どもと一人の婦人を雇う。一個の労働者家族の生計を得るために、以前に比べて四倍だけの労働者の生命が消

費されるということです。

つまり、生産的資本が増大すればするほど、分業と機械の使用とがますます拡大し、分業と機械の使用とが拡大すればするほど、労働者間の競争がますます拡大し、彼らの賃銀がますます収縮していくのです。

司会Ⅱ過剰になった労働者、首を切られた労働者はどうなっていくのでしょうか。

IⅡ例え新たな就業部門に移ったとしても、賃金は下がるといことですね。産業部門から機械によって投げ出された労働者大衆は、より悪く支払われている他の産業部門以外に避難所を見出せるであろうか。と書かれています。司会Ⅱ好条件の場所には就職できないということですね。新たな就業部門、機械をつくる生産部門では雇用の創出があるとなったとしても、簡素化が進み、熟練労働者の必要性は低くなっていくことは同じであって結局条件は悪

◆みんなの学習講座

くなる一方であるということですね。
司会Ⅱいまの職場での労働者の状態にも当てはまりそうですね。

NⅡ郵便局では、区分機はすぐに新しいものに代わります。郵便番号の桁数が5から7になった時、今では番号に加えて活字も読み取るものになっています。そして区分数もだんだん増えてきます。でも郵便バイクはいくら故障があっても、事故しても直さない。必要なものだと思うのですが、更新するものしないものに差があります。
SⅡ少々安全面に不安があるのが、不便だろうが直接儲けに関係ないということでしょうね。

司会Ⅱ区分を多くできても、配達をするには限界がですよ。そうなれば安い労働者を増やしていくという風になつていきますよね。

TⅡもうひとつは配達時間を長くされています。労働強化です。

NⅡ配達数と目安配達時間があるので、

1通当たり4秒とか6秒とか配達時間が計算され、競わされています。目標は4秒で、遅くなれば指導とか、評価につなげようとしています。しかもそれを計算するのはあくまで端末で機械なのです。

社会主義の必然性

最後に、既存の巨大な生産手段をより大きな規模で利用し、そしてこの目的のために信用上の全要素を運用すればするほど、産業上の地震とみなせるような恐慌が増していきます。支配者たる資本は、自分の奴隷の死体を恐慌で没落する全犠牲労働者を、墓穴へ引きずり込むのです。

要するに、資本が急速に増大すれば、労働者間の競争は遙かにいつそう急速に増大する。すなわち、労働者階級のための雇用手段たる生活手段は相対的にますます減少するが、それにも関わ

らず、資本の急速な増大は賃労働にあって最も都合な条件なのです。

SⅡ恐慌が起きると、全てが破壊されて新しい生産が生まれます。恐慌とは、資本主義を立て直すために、会社や全てのものを一旦潰して、新たな生産手段が生み出されるのです。そうして資本主義は延命してきました。

YⅡ資本は、剰余価値を得るために生産をし、その拡大を繰り返して蓄積をしていきますが、既に剰余価値が下がり、拡大していかないとところまできている。このままいけば過剰生産恐慌にしかならないのではないのでしょうか。

SⅡ景気は本来サイクル的に好況と不況を繰り返していきます。しかし現在リーマンショック以降、下がった景気が上昇しない状態になっています。

YⅡ最後のところで、「資本の急速な増大は賃労働にとって最も都合な条件なのである。」となっています。なぜでしょうか。

◆特集 みんなの学習講座

KⅡ資本が増大すれば、工場の拡大など資本の投下も増え、合わせて労働者の雇用も増えるという点には利点がありますが、結局は賃金・労働条件は相対的に下がっていくことにはなりません。また恐慌になれば、労働者は死ぬとばかりに首を切られます。一時は労働者も増えるけれど、結局は労働者にとって不利益になるだろうという皮肉で書かれているのではないのでしょうか。

SⅡこれがこのテキストの『賃労働と資本』という命題なのです。資本家は儲けのために労働者の労働力を買って働かせるしかない、労働者は生きるために資本家のもとで労働力売って働くしかない。つまり『賃労働と資本』というのは階級関係なのです。労働者は資本が増大していけば賃金も条件も悪くなっていくけれども、一方で資本が増大して大きくなっていかなければ生きていくことができないのです。つまり資本主義社会そのものの矛盾であ

り階級矛盾なのです。そこで、それがなぜ社会主義の必然性となるのかということ、資本論の第3分冊第7節(岩波文庫版)にこう書かれています。

「この転形過程のあらゆる利益を横領し独占する大資本家の数の不断の減少とともに、窮乏・抑圧・隷従・墮落・搾取の度が増大するのであるが、また、たえず膨張しつつ資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結集され組織される労働者階級の反抗も、増大する。資本独占は、それとともに、かつそのもとで開化した生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的外被とは調和しえなくなる。一点に到達する。外被は爆破される。資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。」

YⅡ向坂逸郎の書籍では、必ずこの部分強調して書かれています。「窮乏・抑圧・隷従・墮落・搾取の度が増

大するのであるが、また、たえず膨張しつつ資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結集され組織される労働者階級の反抗も、増大する。」というところが重要なのです。

繰り返し抑圧されることから学び、労働者の意識が変わり、組織的な反抗の力を持つことになるということ、これで社会主義が科学となつたと強調されているのです。つまり、それが労働者の正しい生き方であつて、もつと言えればそうしか生きる道はないということです。

司会Ⅱ苦しい職場実態での不満は仲間に向くように仕向けられてきています。資本に対する怒りを結集していくためには、『賃労働と資本』で学んだ階級意識を持っていく運動が重要なのですね。

今回の5章で本文は終わりましたが、次号は『賃労働と資本』を学習してきたことの補強を行って最終にします。